

読者ふれあいページ

「こちら虹」は楽しかったこと、感動したことをつづってください。「お助け倶楽部」のアイデアやお知恵をお寄せください。電話番号を明記ください。

役に立つ命と役に立たない命

出雲市斐川町・仁照寺住職

江角 弘道

私たちには、たとえば、虫を害虫と益虫に、草を雑草と薬草に分け、「役に立たない命」を取り除こうとする側面があります。

次の詩の作者(山田康文君)は、1960年に奈良県桜井市に生まれました。難産で生まれたためか、康文君は脳性まひでした。お母さんは、康文君を産んだことに悩みぬいて一緒に死ぬことを考えました。しかし、死を押しとどめたものは家族ぐるみの愛と康文君の強い生きる意欲でした。

康文君は8歳で、奈良の明日香養護学校に母子入学しました。その向野幾代先生が、康文君の気持ちを表現しようとして試みます。しかし満足に言葉を話せない康文君から言葉を引き出すには、大変な苦勞があります。先生の「投げかける

混迷・生きる

教えの庭から

言葉」が康文君の「言いたい言葉」の場合は、康文君がウインクでイエス、ノーの時は舌を出すという取り決めをして、次の詩を完成させました。この詩の冒頭の「ごめんなさいね お母



挿絵 MASAKI

さん」だけで1カ月かかったといえます。大きくなった

お母さん ぼくが生まれたい視線に

ごめんなさいね お母さん ありがとう お母さん

お母さんが いるかぎり ぼくは生きていくのです 脳性マヒを 生きてゆく やさしさこそが 美しい 悲しさこそが 美しい そんな 人の生き方を教えてくれた お母さん お母さん あなたがそこに いるかぎり (向野幾代著『お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい』、扶桑社)

普通には「なぜこんな体に産んでくれたか」と親に文句を言うことが考えられますが、康文君は「お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい」とわびています。また「ありがとう お母さん」と感謝をしています。これらの言葉は、役に立つとか立たない、損か得かなどを超えた言葉になっています。

この詩は、まさしく康文君の中の仏様が語られたものだと私は考えました。この詩の中で「やさしさこそが大切で 悲しさこそが美しい」とは、仏様の言葉そのもののようです。この詩は、仏様の存在を確信させる詩ではないでしょうか。康文君のような障害者の問題は、実は高齢者たちの問題でもあります。高齢になるとほとんどの人がなんらかの障害を抱えるようになります。仏教では、命の変化を成住壊空(この世に生まれてきて、住み活動をし、そして体が壊れてきて、死んで空に帰る)といます。高齢者は「壊」の時期に相当するわけです。今健康な人は、障害が先送りされているだけということですね。昔は、年老いて働けなくなつた者を不要として、姥捨山うばすてやまに捨てたという伝説があります。年を取り障害者になる前から、私たちが持つべき「命の視点」とは、「役に立つか、立たないか」ではなく、「仏様に生かされている存在」であることを悟り、感謝の生活をしてゆくことではないのでしょうか。